

「復元」の意義を問う：

平井聖講演会「復元すること — 東京駅はそのまま復元してはいけません —

A Meaning of Reconstruction:

Tokakai Lecture 2010: Kiyoshi Hirai "Reconstruction: The Tokyo Central Station Should Not be Restored Completely."

青柳憲昌〔助教〕

Norimasa AOYAGI (Assistant Professor)

一般に「復元」とは、すでに失われた歴史的な建物を、基本的に全て新材を用いて再建することを意味する。よく似た言葉に「復原」があるが、こちらは文化財の修理等でよく用いられ、創建時から現在までに改造された部分を旧状に戻すことを意味する、とされる。つまり、新材ばかりではなく、部分的に旧材を用いる点で「復原」は「復元」とは異なるわけだが、その定義上の違いはあまり明瞭とはいえず、むしろ「復元」も「復原」も、旧の姿を再現しようとする点で、本質的には同じ行為と考えたほうがよい。

よく知られているように東京駅は、明治・大正期の日本建築界における重鎮・辰野金吾の設計により1914年に竣工したもので、2003年には国の重要文化財に指定された。1945年、第二次世界大戦中の空襲により両翼ドームや3階部分などが失われたが、それらを復元して竣工時の状態を再現しようとする工事が現在進行中である。「復元（復原）」は今日的なテーマの一つとなっているが、その是非については専門家の間でも賛否両論である。2010年7月に東工大で行われた平井先生の講演会は、そうした議論に一石を投じるものであった。

＊

講演の中で平井先生は「いわゆる天守の復元だけではなく、建築史をやっている人間というのは、じつは日常的に復元というものを考えていないと講義すらできない」と述べていた。つまり、古い建築は通常、創建後に数多くの改変を経ており、それらの改変が行われた時代毎の技術や嗜好などが堆積しているのが常なので、歴史的な建物を復元し、創建当初の状態を考えないと「建築史」というストーリーを組み立てられないということである。いわば建築史家は本来的に「復元」者というわけである。講演会では、過去の建築史家たちによる著名な復元案が紹介された。たとえば、福山敏男による出雲大社本殿の復元案（その巨大さは、縄文時代から貫を用いる技術があったことが近年分かったことで立証されたことに言及された）や、浅野清による法隆寺夢殿・唐招提寺金堂の復元案（中・近世の修理で「日本の風土に合わせるために」屋根勾配を急にしたことに言及された）などが紹介された。

これまでに平井先生は、建築史研究上の復元のみならず、城郭や御殿などの歴史的な建物の再建事業にも数多く携わってきた。それらの幾つかの事例が次いで紹介された。図として復元案を描くのは異なり、実際に建てるとなると、さまざまな困難が立ち現れてくることは想像に難くない。たとえば、金沢城五十間長屋（2001年竣工）では、建築基準法により、柱断面を実際（創建時）よりも太くせざるを得なかったという。一



＊

最後に、平井先生による東京駅復元案が紹介された（下図）。それは、「建築トリエンナーレ奈良1998」のデザイン・コンペ「歴史都市の保存と共生—歴史を生きた名建築の再生」の入選案である。「中央停車場（東京駅）二段階復原計画」と題されたこの案は、東京駅の正面向かつて右ウイングを竣工時の状態に復元し、中央部を現状のまま、左ウイングを戦災直後の状態に復元するという斬新な提案で、その設計主旨には次のように書かれている。「日本には敗戦のモニュメントがない。敗戦を終戦といいかえて、敗戦と敗戦に至る過程を、消し去ろうとしているようにすら思える。敗戦と敗戦にいたる歴史へのおもいは人によって異なっても、常に呼びさまして反省し、明日への糧にしくはなくてはならない。敗戦への道の出発点と結末を示すモニュメントには、東京駅がふさわしい」（『新建築』1998年11月号、p.256）。つまり、日本の近代史を象徴する記念碑として東京駅を捉え、完全には復元せず、むしろ戦災時の姿や戦後史が刻まれた部分も積極的に残そうという提案である。

「復元」は、建物が創建された当初の一時点の状態を再現しようとするものであり、その後の建物の長い歴史を消し去ってしまう。しかし、いうまでもなく建築物の価値は竣工時の一時点だけにあるのではない。平井案は、「復元」の通念に対するアンチテーゼであったように思われる。平井案ほどラディカルなたちではないが、「復元」に対する批判は、国による文化財の修理事業が開始された明治中期以降、日本の近・現代を通して伏在し、繰り返して提出されてきた。しかし、それでもなお、東京駅は現在も「完全復元」に向けて着々と工事が進行しているし、文化財修理では相変わらず「当初復原」が行われ続けている。たえず批判に晒されながらも、一貫して「復元（復原）」が行われてきたということは、おそらくそこに政治・社会的ないしは日本文化的な必然性があるのではなかろうか。そういうことを考えさせられた講演会であった。



「中央停車場（東京駅）二段階復元計画 敗戦のモニュメント」（1998）

Lecturer, Professor K.Hirai questioned us about the meaning of "Reconstruction of Historic Buildings," showing many examples including works he actually designed and produced. Through the ongoing reconstruction project of Tokyo Central Station, he suggested the importance of historical value or symbolism as a national monument rather than the original design of the building.